

40 常夜灯ほか(関戸)

六間川の旧樋門跡

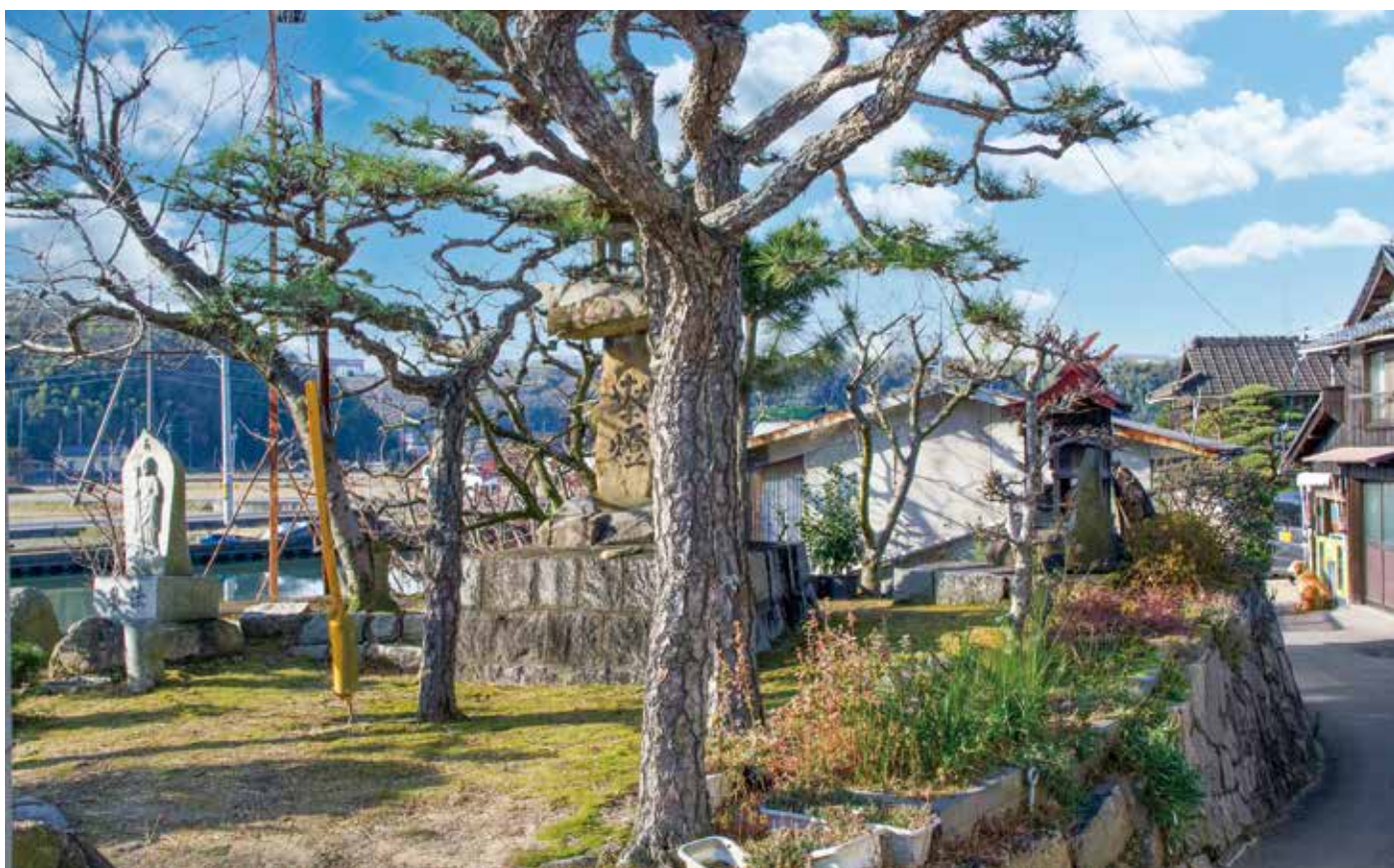
水難者慰霊塔・木野山神社(撫川720南)

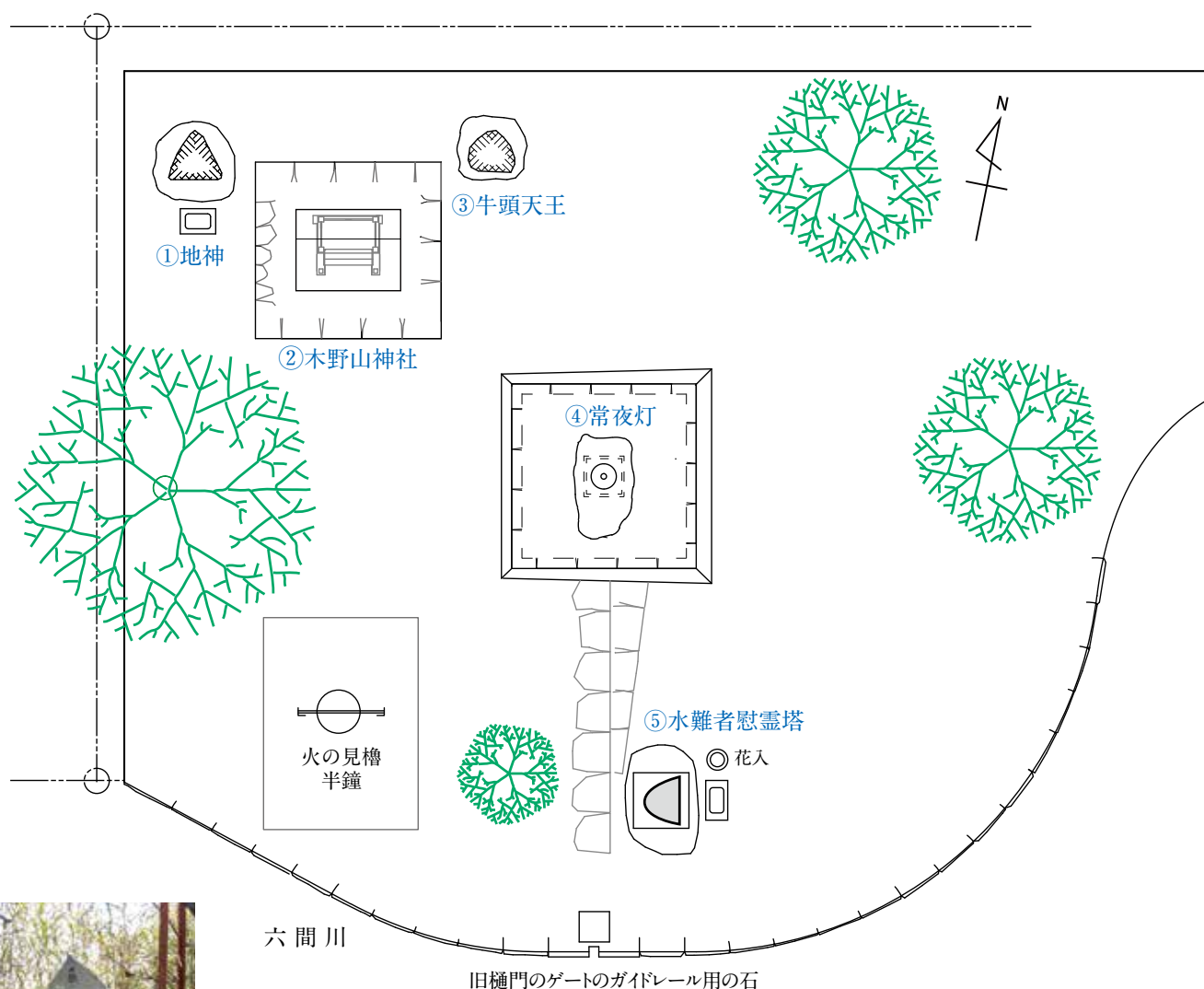


④常夜灯

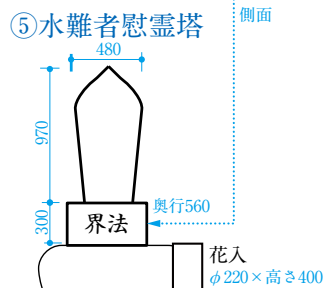


①地神 ②木野山神社 ③牛頭天王

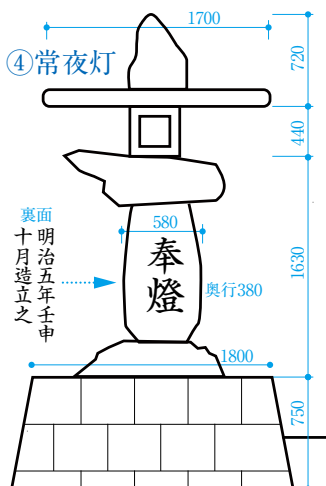




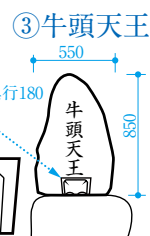
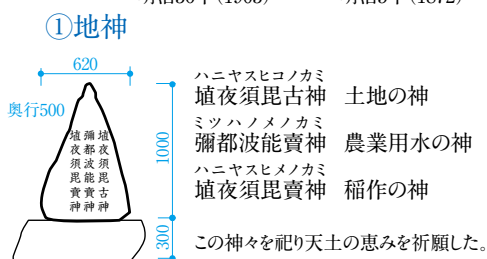
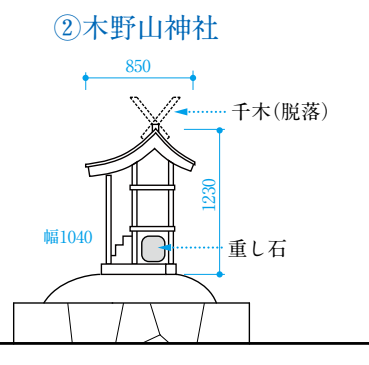
明治卅六年
七月廿三日
建立為水死
群靈菩提為
世話方
関戸信者中
妹尾崎
庄村下庄
發起人 平松源吉



明治36年(1903)



明治5年(1872)



明治12年(1879)
側面 明治十二年八月十五日
雀旧八歳乙卯
献 木野山宮
奉 奉燈

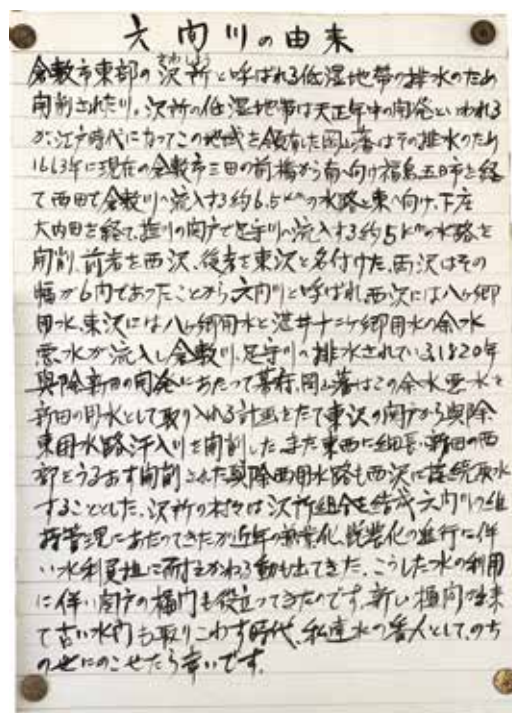


旧樋門の設置場所で、対岸には番小屋があった。自然石で作られた常夜灯は巨大である。当時、ここが水運には重要な場所であった事を表しているのだろう。水難者慰霊塔は明治36年に起きた大水害の犠牲者の慰霊塔だとのこと。風が強い場所なので、木野山神社の社殿の床下には重し用の石が置かれ吹き飛ばされるのを防いでいる。しかし屋根の千木は脱落している。

六間川について



火の見櫓・半鐘



六間川の由来(平松氏記・関戸公民館内)

六間川の由来

倉敷市東部の沢所と呼ばれる低湿地帯の排水のため開削された川。沢所の低湿地帯は天正年中の開発といわれるが、江戸時代になってこの地域を領有した岡山藩はその排水のため1663年に現在の倉敷市三田の前橋から南へ向け福島、五日市を経て西田で倉敷川へ流入する約6.5kmの水路と、東へ向け下庄、大内田を経て撫川の関戸で足守川へ流入する約5kmの水路を開削、前者を西沢、後者を東様と名付けた。

両沢はその幅が6間であったことから、六間川と呼ばれ、西沢には八ヶ郷用水、東沢には八ヶ郷用水と湛井十二ヶ郷用水の余水悪水が流入し倉敷川、足守川へ排水されている。

1820年、興除新田の開発にあたって幕府、岡山藩はこの余水悪水を新田の用水として取り入れる計画をたて、東沢の関戸から興除東用水路汗入川を開削した。また東西に細長い新田の西部をうるおす開削された興除西用水路も西沢に接続取水することとした。

沢所の村々は沢所組合を結成、六間川の維持管理にあたってきたが、近年の兼業化、脱農化の進行に伴い水利負担に耐えかねる動きも出てきた。こうした水の利用に伴い関戸の樋門も役立ってきたのです。新しい樋門が出来て古い水門も取りこわす時代、私達水の番人として、のちの世にのこせたら幸いです。